

長崎医療センター  
座談会 Vol. 26

# 千燈照院

千燈照院とは…  
長崎医療センター千人の職員  
が力を合せて高度医療の実現  
にまい進する姿勢を表す言葉。

## 千燈照院を振り返って

今回が最終回となる千燈照院です。  
当院の病院力と総合力に関わる対談を、話し言葉の  
ニュアンスも消えないよう毎回2頁に治める作業  
は、編集局として大変であっても、やりがいのあるも  
のでした。

### 対談

長崎医療センター院長 江崎 宏典  
難治性疾患研究部長 小森 敦正

江崎: 当院での医療とその取り組み等を、病院内外の皆様に紹介する趣旨ではじまった“千燈照院”も今回が最後となります。SENSAI編集長である小森先生とこれまでの千燈照院を振り返りたいと思います。



長崎医療センター院長  
**江崎 宏典**  
(えざき ひろのり)  
平成24年より現職

小森: 故松岡先生から編集長を引き継ぎ、SENSAIのメインの企画にも携わらせていただきました。最終回に出席できて光栄です。この座談会のタイトル“千燈照院”は院長が命名されたのですよね。

江崎: “千燈照院”とは、私が院長に就任した際に、作成した造語です。もともとは“一灯照隅 万燈照国”、1つの灯火だけでは隅しか照らせませんが、その灯火が万という数になると国中を照らすことができるということばです。長崎医療センターには1,000人以上の職員がいますが、千の燈が病院を照らせば地域の医療も充実してくるのではないかと思います、千燈照院ということばを作りました。



難治性疾患研究部長  
**小森 敦正**  
(こもり あつまさ)  
平成26年より現職

小森: 座談会の内容を振りかえってみると、脳卒中ホットラインから外来化学療法センターまで、

主にがん治療、救急医療、チーム医療に関して様々なテーマで座談会が繰り返されています。

江崎: 過去25回、様々な話題にて色々な方のお話を聞いたのは大変うれしく、読者の皆様にとっても役にたつ内容だったのではないかと思います。特に国民の2人に1人が罹患するといわれているがんについてのtopics/座談会を通して、当院はがん拠点病院として、治療だけでなく緩和・就労支援等にも取り組む必要があることを再確認できました。

小森: がん医療におけるcure(治癒)とcare(心身のケア)

回	掲載号	テーマ
1	2015年2月号	脳卒中ホットライン
2	2015年3月号	ステントグラフト
3	2015年4月号	病棟薬剤師の配置
4	2015年5月号	最新の肺がん治療
5	2015年6月号	最新の肝がん治療
6	2015年7月号	上部消化管がんの最新治療
7	2015年8・9月合併号	下部消化管がんの最新治療
8	2015年10、11月号	特別企画: “県央地区の医療連携について語り合う”
9	2015年12月号	前立腺がんの最新治療
10	2016年3月号	急性心筋梗塞の最新治療
11	2016年5月号	特別版 長崎医療センターの今後のあり方
12	2016年7月号	乳がんの最新治療
13	2016年8・9月合併号	子宮頸がんの最新治療
14	2016年10月号	NSTチーム
15	2016年11月号	特別企画: “国病久原会の未来を拓く”
16	2016年12月号	緩和ケアチーム
17	2017年2月号	感染対策チーム
18	2017年3月号	褥瘡チーム
19	2017年4月号	RSTチーム
20	2017年5月号	周産期母子医療センター
21	2017年6月号	EMTAC(医師同乗救急自動車)
22	2017年7月号	治験管理室
23	2016年8・9月合併号	患者サポートチーム
24	2017年10月号	医療安全
25	2017年11月号	外来化学療法センター



をつなぐ、がん拠点病院としての役割を、様々な分野にて多職種チームで関わっていることも印象的でした。

江 崎：がん治療には長く時間もかかります。がん患者さんに対して全人的な関わり方を実践することが必要ですね。

一方で、心臓や脳血管などの循環器に関する診療もこの10年で大きく変わりました。特に脳血管障害に対する急性期の介入がすすみ、薬物治療、NMC-SHOT、血管内治療等によって、機能を維持することが大事であるということを理解しました。チームとしての取り組みを積極的に行っているのも印象的でした。今後は地域の医療機関と連携して、お互いに補完しながらcureとcareをつなぐことがますます重要になってくるのではないかと思います。例えば地域の介護施設とも、どのように連携していくべきかが今後の課題のひとつですね。

小 森：地域連携という点では、大村市医師会長、諫早医師会長にもお越し頂きました。

江 崎：医師会の会長にお越し頂き、県央の地域連携について語り合えたのは、とても有意義でした。地域包括ケアシステムを確立し実践していくことが、回復期医療には更に必要となってきます。地域の中での

チーム医療ですね。

小 森：座談会では多くのチーム医療も取り上げましたが、色々な分野でそれぞれの特色をもって、当院のチーム医療は進んでいるようですね。

江 崎：チーム医療を進めることは医療の質を高め、医療安全を担保するために必須です。最近は働き方改革という点でも、仕事をシェアして、安心して働ける就労環境整備のために、チーム医療をもっと進めていく必要があると考えています。

小 森：患者さんの安全と安心を確保するためにも、従業員の健康とメンタル面の維持につながる働き方改革は大事になってきますね。

江 崎：医療は学術的に日進月歩です。どのように学術情報をup to dateし、それをみんなでもどうcatch upしていくべきか。社会の状況の変化も考えていながら、病院をすばらしいものにするために、みんなでも考えていきたいと思っています。

小 森：千燈照院の座談会企画に携わることができ、当院の医療活動を隅から隅まで再確認することができました。

江 崎：最後に、今まで千燈照院に携わっていただいた皆さんに感謝申し上げてこの座談会を終えたいと思います。ありがとうございました。

※座談会のバックナンバーは病院ホームページに掲載しております。